

Aya Sofya 3605 ペルシア語写本 *Nizām al-Tawārīkh* 中のセルジュク朝関連の記事について (上)

井 谷 鋼 造

The Saljūqids described in the Persian manuscript of *Nizām al-Tawārīkh* (Aya Sofya 3605, Süleymaniye, İstanbul) (I)

KOZO ITANI

は じ め に

アラビア文字を用いて表記されるペルシア語の作品が出現して以来 300 年余りの時間を経たヒジラ暦 7 世紀=西暦 13 世紀にペルシア語は、東は中央アジア、アフガーニスタンから西はアナトリアに至る、現在のイランを中心とする諸地方で文章語としての揺るぎない地位を獲得していた。サーマーン朝 (875-999)、ガズナ朝 (977-1186)、セルジュク朝 (1038-1308) の宮廷では韻文を主とする文学作品の多くがペルシア語で書かれていたし、ディーヴァーンと呼ばれた中央、地方の官僚機構においても公文書類は原則としてアラビア語で作成されることが多かったが、次第にペルシア語のものも現れ始めていた。イランのセルジュク朝政権の滅亡 (1194) 後この地域を支配したホラズムシャー朝の下でもこの傾向は変わらず、13 世紀にモンゴル人が西アジアに進出するとペルシア語はモンゴル帝国の「公用語」の一つとして以前にも増してその重要性を高めた。その結果として 14 世紀に入るとイランを中心とする地域では、公文書類においてもペルシア語の使用はアラビア語と並ぶまでになり、以後中央アジア、インド、アナトリアを含めたイスラーム世界東方にはペルシア語文化圏が成立することになる。こうしたペルシア語文化圏成立の最も顕著な現象としてペルシア語による世界史、*Jāmi' al-Tawārīkh* (『諸史の集成』通称は『集史』1306/7 年完成、以下 JT と略) が 14 世紀初頭にイルハン国《イランを中心とした西アジアのモンゴル人政権》の宰相ラシードウッディーン (Rashid al-Din Faḍl Allāh Hamadāni, 1247-1318) によって著されたことが挙げられる。北アフリカを含む西アジア・イスラーム世界のみならず、中国、インド、ヨーロッパ、イスラエル、

Aya Sofya 3605 ペルシア語写本 *Nizām al-Tawārikh* 中のセルジューク朝関連の記事について (上)

オグズ《トゥルク族の一派。セルジューク朝と共に西アジアに到来し、以後イーラーン、アナトリアの政治史に大きな足跡を残した》の歴史までも含めた世界史がペルシア語で書かれたことは正に画期的なことであった。ペルシア文学史研究において大きな足跡を残した英国のブラウン (E. G. Browne) はその主著『ペルシア文学史』第3巻 (*A literary history of Persia*, Vol. III, Cambridge U. P., 1976 (reprint)) の中でラシードの『集史』の扱う範囲の広さと独創性を評価して「歴史の領域でその価値に比肩し得るペルシア語の散文作品が他にあるかどうか疑わしい」と述べている。(op. cit., p. 75)

さて、本稿で取り扱う、カーディー、ナースィルッディーン・バイダーウィー (Qāḍī Nāṣir al-Dīn al-Bayḍāwī) の著作 *Nizām al-Tawārikh* (『諸史の秩序』以下 NT と略) は上述のラシード著『集史』以前に著された、主としてイーラーンの歴史を概説したペルシア語による著作であり、前述のブラウンによれば「面白くない、無味乾燥な小著」「おそらく出版に値しない」と酷評されている。(op. cit., p. 100) 確かにブラウンの評するように『集史』などと比べれば、取るに足りないような分量の中に人類創生以来のイーラーンの歴史が手短かに概説されているだけなので、NT の歴史資料としての価値は低いかもしれない。しかし、この歴史書は正にその手短さ故に、後述するように、以後の歴史書の中にも引用され、現在まで残されてきた写本の数も少なくないのである。本稿で扱う NT のセルジューク朝関連の記事に限ってみても、14 世紀のペルシア語による他の歴史著作のうち、ハムドゥッラーフ・ムスタウフィー (Ḥamd Allāh Mustawfī Qazwīnī) の *Tārīkh-i Guzīda* (『選史』1329/30 年完成。以下 TG と略)、バナーカティー (Abū Sulaymān Dā'ūd Banākātī) の *Rawḍat Ūlī al-Albāb fī Ma'rīfat al-Tawārikh wa al-Ansāb* (通称は『バナーカティー史』1317 年完成。以下 TB と略)、シャバーンカーライー (Muḥammad b. 'Alī Shabānkārā'i) の *Majma' al-Ansāb* (『諸系譜集』1332/3 年完成。以下 MA と略)、アクサラーイー (Karīm al-Dīn Maḥmūd Aqsarā'i) の *Tadhkira* または *Musāmarat al-Akhhār* (『諸伝承夜話』1334 年完成。以下 MAA と略) には明らかに NT からの引用が見られる。ブラウンの評価は正当なものとしてもそのみで NT の価値が決定されてよい訳ではなく、以後の著作にも一定の影響を持ったという点から NT を歴史資料として再評価することも可能ではなかろうか。このような問題意識のもと本稿ではまず、NT の著者バイダーウィーについて紹介し、次に本稿で用いたペルシア語写本 Aya Sofya 3605 について触れ、この写本を基にした NT のセルジューク朝関連の記事を訳出してそれらが上述の他のペルシア語の歴史書のうちにどのように引用されていたかを確認してみたい。

1. NT の著者バイダーウィーについて

現在刊行されつつある *Encyclopaedia Iranica*, Vol. IV, Fasc. 1, (1989) 所載のバイダー

ウィーの項目 (pp. 15-7, Etan Kohlberg 執筆) に主として基づいて NT の著者バイダーウィーについて以下に説明する。バイダーウィーはそのニスバの通りイーラーンのファールス地方はバイダー (Baydā) の出身者である。バイダーはアラビア語で「白」を意味する女性形の形容詞であるが、この町はファールスの中心都市シーラーズの北方約 40 km のところにあり、先にその名を挙げたハムドゥッラーフ・ムスタウフィーの、当時の地理に詳しい別の著作 *Nuzhat al-Qulūb* (『諸心の遊樂』1340 年完成。以下 NQ と略¹⁾) によれば、バイダーは

小さな町であり、土の色が白い。そのためバイダーと呼ばれる。カヤーニー朝の Gushtāsb b. Luhrāsb が造った。気候は適度で流水があり、穀物や果物が生育する。多くの場所がバイダーに属している。10 ファルサング四方の牧地を持つ。バイダーからは、カーディーのタフスィールの著者、カーディー Nāṣir al-Dīn Abū Sa'īd 'Abd Allāh b. Muḥammad b. 'Alī al-Bayḍāyī その他、学問に精通した (mutabāḥḥir) ウラマーが出ている。[NQ : 122-3 / 270.r]

と説明されている。ここにはバイダーの出身者として当のバイダーウィー自身の名が登場しているが、或いは NQ の著者ムスタウフィー自身とバイダーウィーの間には個人的な面識があったのかもしれない。生年は不詳であるが、彼はシャーフィイー派の法学者の家系に生まれ、父 Imām al-Dīn (1274/5 年没) はシーラーズの大カーディーであり、当時ファールス地方を支配していたトゥルクマン系アタベグ政権サルグル朝の Abū Bakr b. Sa'd (治世 1226-60 年) の下でファールス地方全体のカーディー職を務めたこともあった。バイダーウィー自身もこのような環境の下で、セルジューク朝以来イーラーンでは支配的であったシャーフィイー派の法学とアシアリー派の思弁神学を学び、イルハン国の第 2 代アバカ・ハン (治世 1265-81 年) 時代にファールス地方全体のカーディーとなり、アバカの死後シーラーズのカーディー職についたという。アバカの子、アルグン・ハン (治世 1284-91 年) 時代に故郷バイダーのカーディーに任命されたが、その後イルハン国の首都であったアーザルバイジャンのタブリーズに移住し、その地で没した。バイダーウィーの没年については、1286 年、1292 年、1293 年、1308/9 年、1310/1 年より後のいつか、1316 年とかなりの幅をもって説が分かれており、詳しい説明は省くが、上記の *Encyclopaedia Iranica* の項目によれば、これらのうち最も晩い 1316 年説の可能性が高い。この年代まで生存していたとすれば、タブリーズに住んでいたというバイダーウィーはイルハン国の宰相で、自らも当時空前の世界史である、『集史』を完成させたラシードとも知り合っていた可能性がある。

バイダーウィーの主著は上で訳出したムスタウフィーの記事にもある、カーディーのタフスィール《イスラームの聖典『クルアーン』の注釈書》として知られる、*Anwār al-Tanzīl*

Aya Sofya 3605 ペルシア語写本 *Nizām al-Tawārikh* 中のセルジューク朝関連の記事について (上)

wa Asrār al-Ta'wil (『啓示の光と比喩的解釈の秘密』) である。この注釈書はザマフシャリー (Abū al-Qāsim Maḥmūd al-Zamakhsharī, 1075-1144) の注釈書 *al-Kashshāf* に大きく依存しながらもザマフシャリーのムアタズィラ派的な解釈を排除してスンナ派の正統的解釈を提示しようとしているという。この注釈書はイスラーム世界で、その相対的簡潔さ、文法的、法的、神学的、歴史的な素材とうまく結び付けられていることなどで次第に受容されるようになり、また早くも17世紀にはヨーロッパでの『クルアーン』研究にも用いられて有名になっていった。バイダーウィーの著作の中でもこの注釈書は最もよく知られ、バイダーウィーと言えば、そのタフスィールを連想することがイスラームの文献学では常識ともなっているのである。このような法学者として、また神学者としての活動を専らにしていたと思われるバイダーウィーがNTのような歴史書を残した理由は何か、NTの構成や概容などをAya Sofya 3605写本の説明を交えて次に見てみよう。

2. Aya Sofya 3605 ペルシア語写本 NT について

現在、トルコ共和国イスタンブール市内のシュレイマニエ図書館に所蔵される、請求番号 Aya Sofya 3605 写本²⁾は二つの作品を含んでいる。全体が172葉から成るこの写本の前半100葉にはイルハン国初期のシーア派神学者、天文学者ナスィールッディーン・トゥーサー (Naṣīr al-Dīn Abū Ja'far Muḥammad al-Ṭūsī, 1274年没) の鉱物学、宝石学に関する著作である *Tansūkh-nāma-yi Īlkhānī* (以下TNIと略) が筆写されており、残りの72葉をバイダーウィーのNTが占めている。作品は異なるが、写字生は同一で第172葉裏末尾にあるNTの奥書によれば、Muḥammad b. al-Ḥusayn al-Kāzīrūnīなる人物により、NTの方はヒジラ暦748年ラジャブ月下旬 (1347. 10. 27-11. 5) にルームのカイセリ (Qayṣariya) で筆写が完成しており、一方TNIはそれより先の同年ラジャブ月11日 (1347. 10. 17) の完成である。第100葉裏末尾のTNIの方の奥書³⁾には上記の筆写完成の日付の他にNTのそれにはない情報が書かれているが、それは筆写の場所がカイセリのナスビーヤ病院 (Dār al-Shifā' al-Naṣbiya) で



写真1 現在のガウハル・ナスビーヤ医学史研究所 (病院跡) 入口 1991年12月12日撮。

あったことである。現在カイセリの町の中心部にはセルジューク朝時代のマスジドやマドラサ、墓廟などの遺跡が修復されて残っているが、その中に現在カイセリにあるエルジイエス大学のガウハル・ナスィーバ医学史研究所となっていて、かつての病院跡を修復して博物館として内部を公開している施設がある。この施設の入り口の上方にはアラビア語の石刻碑文がはめ込まれており、セルジューク朝時代のカイセリの建築物に残る碑文類を調査、採録した Khalil Edhem の *Qayşariya Shahri, Istanbül, 1334, s. 31* によるとその碑文は次のように読める。

偉大なるスルターン Ghiyāth al-Dunyā wa al-Dīn Kaykhusraw b. Qilij Arslān の時代が永続するように。この病院 (al-māristān) の建設は Qilij Arslān の娘、王女 (al-Malika) 'Isma al-Dunyā wa al-Dīn Kawhar Nasiba—神がおまえたちに満足するように—の遺言で 602 年になされた。⁴⁾

この碑文の内容から、602 (1205/6) 年に当時のルームのセルジューク朝スルターン、ギヤースディーン・カイホスロウ I 世 (在位 1204-10 年) の姉妹ガウハル・ナスィーバ王女の遺言でカイセリに病院が建設されたことが判るのであるが、上述の現存 Aya Sofya 3605 写本前半の TNI が書かれたとされるカイセリのナスビーヤ病院とはこのガウハル・ナスィーバ病院に当たる可能性が大きい。写本の奥書にあるナスビーヤ (al-Naşbiya) と王女の名ガウハル・ナスィーバ (Nasiba) とはアラビア文字の綴が違っているのであるが、音が似ていること、カイセリには 13~4 世紀他に有名な病院跡は少なくとも知られていないことなどから考えて恐らく写本が書かれた場所はカイセリのガウハル・ナスィーバ病院であろう。

さてこのように Aya Sofya 3605 写本の書かれた年代と場所を特定できたが、この写本はペルシア語文献の書誌学的情報を網羅した C. A. Storey 著 Yu. E. Bregel' 増補の *Persian Literature (Persidskaja Literatura, chast' 1, Moskva, 1972, str. 299)* によれば、NT の写本としては現存するもののうち 3 番目に古いものであり、トルコ共和国のマニサ市とイーラーンのテヘラーン大学にそれぞれ、1314/5 年と 1336/7 年に書かれた写本が存在するという。残念ながら本稿ではこれらの写本を参照することはできなかった。またインドのハイダラーバードとテヘラーンでそれぞれ NT の校訂テキストが出版されていることも上記の *Persian Literature* より分かるが、この二つの校訂テキスト共に本稿では参照できなかった。これらの写本や校訂テキストとの校合は今後の課題としたい。

以下では Aya Sofya 3605 写本 NT の冒頭部を訳出することにより、著者バイダーウィーの執筆動機やその日付、NT の構成などを明らかにしようと思う。

Aya Sofya 3605 ペルシア語写本 *Nizām al-Tawārikh* 中のセルジューク朝関連の記事について (上)

《Aya Sofya 3605 写本 NT 冒頭部 [101 v-103 r] の翻訳》

慈悲深く、慈愛普き神の名において。主が成功を与えるように。無限の賞賛と無窮の感謝が、「在れ」の一言で靈魂の世界を躡し、天空の天体と元素の実体を非存在の隠れ場から存在の空間へともたらした創造者であらんことを。彼は天空の諸層を掲げ、土の敷物を花々や光で飾った作成者。彼は固い岩から優美な花を生育させ、雲の間に火と水を充填させ、溶けた唾の頁に生命あるものの姿を描き、アードムの子孫に理性の光と弁舌の才の装飾を配し、彼らはそれによって高貴の王冠とハリーフ制度のヒルア (khil'a) を見つけた、彼らを様々な存在の結果や支えとなる同列のものの中から選び、大地と時間を彼らへの服従の鼻輪に引き入れた全能者。至高なる彼の言葉。「我らはアードムの子孫を高貴な者として彼らを海や陸に運び、彼らに種々の良いものを支給し、我らが優れて創造した多くのもの以上に彼らを優越させた。」(『クルアーン』17章70節全文)

そして世界の者たちを誤りや迷いから救い、怠惰と無知の荒野から真知の集合へと導いた、我らの預言者ムハンマド・ムスタファー—彼に祝福と平安あれ—と彼に従い、我らに道を示した者たちに無数の賞賛があらんことを。

この書の著者、マウラーナー、偉大なイマーム、最大のカーディー、世界の学者のうちの最も優れた者、諸ウンマのイマームたちの範とする者、時の奇跡、幸運なるイマーム Fakhr al-Dīn Abū al-Ḥasan 'Alī の子、幸運なる、神に許された大カーディー、偉大なるイマーム、マウラー Imām al-Ḥaqq wa al-Dīn Abū al-Fatḥ 'Umar の子、Nāṣir al-Ḥaqq wa al-Milla wa al-Dīn Abū Sa'īd 'Abd Allāh al-Bayḍāwī—彼の土が清められ、彼の住まいが樂園に置かれるように—はこのように言う。至高にして至大なる創造者が成功を与え、宗教諸学の各分野で若さの絶頂時に急ぎの仕事 ('ujāla al-waqt) として一書を書いたので、神の書と天の頁の大部分がその言及で満たされ、宗教と現世の益がその襞の内に保証された歴史の学問 ('ilm-i tārikh) についてもわたしは、過去の人々の経験が施政に当たる人々 (arbāb-i tadābir) に親切な師となり、過去の諸事件を考慮することが道を行く者たちに正直な訓戒者となるように一つの要約書 (mukhtaṣar) を作ろうと思った。それは預言者たちのうちの有名な者たち、偉大なウラマー、偉大なスルターンたち、高貴な王たちの話を含み、簡潔に彼らの状況について述べる。わたしはこの書を浩瀚な (mu'tabar) 歴史の諸書から集め、*Nizām al-Tawārikh* と名付けた。その連鎖のうちに、わたしは、その長さがフラートからジャイフーンまでである、いやむしろこれまで述べられてきたようにアラブの地域からフジャンド (Khujand) の境域までであるイーラーン・ザミーン (Īrān Zamin) の王たちや支配者たちを、アードム—彼に平安あれ—以来今日、つまり674年ムハッラム月21日 (1275. 7. 17) に至るまで途切れずに連ね、それを4部に分け、その益がより普遍的になるようパールスィー (Pārsī) の言葉で書いた。神に栄光があり、至高であるように。彼は成功をもたらす導き手である。以下が書物の内容目次

(fihrist) である。

第1部。アードムの時代の始まりからヌーフの時代の終わりまでにいた預言者たち、相続者たち (awṣiyā) と支配者たち—彼らに平安あれ—について。彼らの数は10名で、その期間は約2500年。

第2部。フルス (Furs) の王たちの列挙と彼らの状況の説明。彼らの数はダッハーク (Ḍahḥāk 'Alwāni), アフラースィヤーブ (Afrāsiyāb Tūrāni), イスカンダル (Iskandar Yūnāni), AYNṬḤN Rūmī⁵⁾をいれて73名, その期間は4181年と数カ月である。

第3部。イスラームのハリーフアやイマームたち—神が彼らを嘉するように—について。彼らの数は55名で、彼らのハリーフア位にあった期間は650年である。

第4部。アッバース家のハリーフア時代にイーラーンの諸地方で独立して専制的に帝王権を行使した偉大なスルターンたちや高貴な王たちについて。彼らは7つの集団 (ṭā'ifa) であり、その数は78名、彼らの王権の期間はヤアクーブ・ブン・ライス (Ya'qūb b. al-Layth)⁶⁾の出現から今日まで420年。

以上に訳出した Aya Sofya 3605 写本 NT の冒頭部より、次のようなことが判明する。

- 1) NT は宗教学者であり、カーディーのバイダーウィーが著したペルシア語による歴史についての著作であり、彼はこの書物を他の浩瀚な歴史書を集めて参照し、それらを簡潔に要約することにより作った。参照した書物の書名は不明。
- 2) NT の内容は4部に分かれ、第1部はアードムからヌーフに至る預言者の歴史、残りの3部はイーラーンとイスラームの歴代王朝史であり、第2部はイスラーム以前の歴史、第3、4部がイスラーム時代の歴史である。
- 3) NT で扱われるイーラーンまたはイーラーン・ザミーンとはフラート (=ユーフラテス) 河からジャイフーン (=アム) 河までの間に広がる地域のことで、それはアラブの住む地域から中央アジア、ファルガーナ地方のホジャンドまでを指すこともある。
- 4) NT の本文がバイダーウィーによって著作されたのは、西暦1275年7月17日のことである。

さて冒頭部のみならず本文の内容に沿って全4部の内容目次をもう少し詳しく見てみよう。各段落末尾の () 内はその内容の始まる写本の葉数を示す。

〈第1部〉アードムからヌーフに至る預言者とその相続者について。彼らの数は10名、その期間は約2500年。(103 r)

〈第2部〉フルス (=ペルシア人) の諸王と彼らの時代にいた預言者や有力者、ウラマーについて。フルスの諸王の全ては同一の根源に発する4層 (ṭabaqa) があり、その数はダッハーク、アフラースィヤーブを含めて71名、彼らの王権の期間はイスカンダルと AYNṬḤN Rūmī の

Aya Sofya 3605 ペルシア語写本 *Nizām al-Tawārikh* 中のセルジューク朝関連の記事について (上)

時代まで 4181 年と数カ月である。(106 r)

第 1 層はピーンダーディー朝 (Pishdādiyān) で、ダッハークとアフラースィヤーブをいれて 11 名。彼らの王権の期間は 2560 年。(106 v)

第 2 層はカヤーニー朝 (Kayāniyān) で、彼らの数は 9 名。王権の期間は 738 年。(112 r)

第 3 層はアシガーニー朝 (Ashghāniyān) で、彼らの数は 20 名。王権の期間は 423 年。(117 r)

第 4 層はサーサーン朝 (Sāsāniyān) で、彼らの数は 31 名。王権の期間は 429 年。(119 r)
〈第 3 部〉 イスラームのハリーフアたちとイマームたち。彼らの王権の期間は 645 年。彼らは 3 層あり、全てはイスマイル・ブン・イブラヒーム (Isma'il b. Ibrahim) の末裔クライシュ (Quraysh) の子孫である。彼らはフルスの王たちと共に系譜上アルファフシャド (Arfakhshad) に至る。フルスは彼のことをフーシャング (Hūshang) と言い、イーラーン (Īrān) とも言う。初めに預言者ムハンマドのことが少し語られる。(133 v)

第 1 層は正統ハリーフアたちで、彼らの数は 6 名、うち 4 名のバイア《臣従の誓い》は完全なものであった。彼らのハリーフア位の期間は 30 年。(135 r)

第 2 層はウマイヤ家のハリーフアたちで、彼らの数は 13 名、王権の期間は 95 年。(137 r)

第 3 層はアッバース朝で、彼らの数は 37 名、ハリーフア位の期間は 520 年。(139 r)

〈第 4 部〉 アッバース朝の時代にイーラーンで独立して帝王権を行使した偉大な王たち、スルターンたちについて。それは、サフファール朝 (Ṣaffāriya)、サーマーン朝 (Sāmāniya)、ガズニー朝 (Ghazniya)、ダイラム人たち (Diyālama)、セルジューク朝 (Saljūqiya)、グール朝 (Ghūriya)、ホラズム朝 (Khwārazmiya)、サルグル朝 (Salghuriya)、マラーヒダ (Malāḥida)、モンゴル (Mughūl) である。(147 v)

第 1 族 (ṭāifa) はサフファール朝で、彼らの数は 3 名、王権の期間は 50 年。(148 r)

第 2 族はサーマーン朝で、彼らの数は 10 名、王権の期間は 102 年。彼らの領土はトゥルク人の地方からヒンド、ファールス、イラークの境域に至り、彼らの居所はブハーラー (Bukhārā)。(149 r)

第 3 族はガズニー朝で、彼らの数は 12 名、王権の期間は 161 年。この王朝の始まりはダイラム人たちの時代の間のことであったが、彼らはサーマーン朝のマワーリーであるので、サーマーン朝に続けて述べられる。(150 v)

第 4 族はダイラム人たちで、彼らの数は 18 名、王権の期間は (脱落) (154 r)

第 5 族はセルジューク朝で、彼らの数は 14 名、王権の期間は約 160 年。(158 r)

第 6 族はマラーヒダと呼ばれるクヒスターン (Qūhistān) の王たちで、彼らの数は 7 名、王権の期間は 181 年。彼らの始まりは 483 年ラジャブ月上旬 (1090. 8. 30-9. 8) で、その終わりは 659 年シャッワール月 (1261. 8. 29-9. 26) である。(162 v)

第7族はサルグル朝で、彼らの数は15名、王権の期間はNT著作の時点までで131年。(164 v)

第8族はホラズム朝で、彼らはホラズムシャーフとも呼ばれる。その数は8名、王権の期間は120年。(169 v)

第9族はモンゴル人。(171 v)

Aya Sofya 3605 写本の NT では全 72 葉、1 頁 17 行の分量の中に以上のような、簡潔ながら盛り沢山な内容の王朝史が書かれており、第1部では神によって創造された最初の間であるアダムからその子孫ヌーフまでの預言者たちの歴史が語られ、第2部では第1、2層でイーラーンの歴史における最初の帝王カユーマルスに始まる伝説的、神話的なピーシュデー、イーラーンの伝説、神話上の英雄時代に当たるカヤーニーの両王朝の歴史が述べられる。ここまでの記述は歴史的叙述と言うよりも伝説や神話を確認するためのそれらの抜粋という性格をもっており、歴史的事実の記録とは言い難い。第3層のアシガーニー朝（バルティア）以降の記事がイーラーンに実際に存在していた王朝の歴史である。尚、第4部の冒頭で名を挙げられた諸王朝のうちグール朝は独立した項目としては述べられておらず、第3族ガズニー朝の末尾で彼らとの関連において僅かに触れられている（153 v-154 r）にすぎない。

さて、上に挙げた内容目次のうち Aya Sofya 3605 写本 NT の特徴を把握する上で重要な手がかりを与えてくれる部分が第4部の第7族サルグル朝と第9族のモンゴルにある。その理由は NT の著者バイダーウィーがファールス地方でカーディーとしてその国家体制内の治安の維持に仕えてきた王朝がサルグル朝であり、13世紀後半にそのサルグル朝をも自らの宗主権下におき、全イーラーンの支配者となったのがモンゴルであったからである。言い換えればサルグル朝とモンゴルは NT の著者バイダーウィーが個人的に直接関係を持っていた存在であったのである。NT の執筆当時イーラーンの全域がその支配下にあった第9族のモンゴルの部分は当然完結した歴史記録とはならず、それまでの各族の説明の冒頭に例外なく書かれていた王朝の支配者の数やその統治期間の合計に関する記述を欠いている。NT の書かれた頃のイルハン国の支配者は第2代のアバカ・ハンであり、NT の第4部第9族にはアバカ・ハンの名と共に当時の有力者二人の名が現れる。一人はイルハン国の当時の宰相シャムスッディーン・ジュヴァイニー (Shams al-Dīn Muḥammad al-Juwaynī, 1284年没) であり、今一人は当時ファールスとバグダードの支配を任されていたスルドゥス (Sūldūs) 部出身のモンゴル武将スグンチャク・アカ (Sūghūnjāq Āqā⁸⁾) である。この二人の人物がアバカ・ハン時代のイルハン国の有力者であったことはラシードの『集史』の記事 [JT III : 102] から明かなことで、1275年という NT の執筆時期を確認する根拠としてもジュヴァイニーとスグンチャク・アカ両名への言及は有益な情報である。一方、第7族のサルグル朝に関わる部分の末尾に現れる年代記述は上記の NT の執筆時期より後の記事が Aya Sofya 3605 写本に追加、挿入された可能性を

Aya Sofya 3605 ペルシア語写本 *Nizām al-Tawārikh* 中のセルジューク朝関連の記事について (上)

示唆する性質を持っている。NT の第7族サルグル朝の記述の末尾は次のように終わっている。

アタベグ Muẓaffar al-Dīn Abish bint Sa'd b. Abū Bakr b. Sa'd b. Zangī は 602 年に帝王位の順番を見つけ、皇帝としてのの軍旗を掲げた。87 年にアーザルバイジャンで他界し、タブリーズの町に埋葬されている。[169 v]

サルグル朝最後の君主はここに訳出したように、アビシュという名の女性であり、彼女はイルハン国の創始者フレグ・ハンの第11子マンクティムル (Mankkū Timūr) の第2夫人となった。[JT III : 14] ここに現れる 602, 87 という二つの年代について考えると、ことはモンゴル時代の事件であるから 602 (1205/6) 年という年代は明らかに誤りで、600 (sittami'a) と 2 (ithnayn) という二つの数詞の間で恐らく 60 (sittin) の数詞が書き落とされたものであろうと推測される。87 という数字が 687 年の 600 が省略されたものであるとすれば、この年代は写本に記される NT の執筆年代 674 年よりも後のことである。ラシードの『集史』によればアバカ・ハンの子、アルゲン・ハンの時代 684 (1285/6) 年にアッラーンの冬営地においてアビシュ・ハトゥン関係の裁判 (yārghū) が行われたことが記録されており [JT III : 205], アビシュがこの頃までに既に故人となっていたとは考えにくい。それゆえ Aya Sofya 3605 写本の NT では第4部第7族のサルグル朝に関する部分の末尾にヒジラ 674 (1275) 年とされる執筆時期よりも後の事件であるアビシュ・ハトゥンの死去とその埋葬地に関する記事が追加、挿入されたと考えられるのである。

3. NT に見えるセルジューク朝関連の記事について

NT のセルジューク朝に関する記事の大半は上記の内容目次にあるように、その第4部第5族に存在するが、西アジアの歴史上セルジューク朝がその勃興から滅亡までの間に密接な関連を持ったという関係で、第3部第3層のアップース朝ハリーフア、カーイム (在位 1031-75) 以降の記事や第4部第3族のガズニー朝、第4族のダイラム人たち (ブワイフ朝)、第7族のサルグル朝、第8族のホラズム朝に関する記事のうちにも断片的に見いだせる。以下ではまず Aya Sofya 3605 写本 NT の第4部第5族の記事を訳出し、それ以外の部分に見いだされるセルジューク朝関連の記事をも参照しつつ、14名とされるスルターンの各治世について、特に NT の記す内容がそれよりも後に著作された TG, TB, MA, MAA などの14世紀前半のペルシア語の歴史著作にどのように継承されていったかを検証するためにそれらの記述との比較を訳注と解説の形で補足してみようと思う。上で既に引用したように NT 第4部第5族の冒頭にある支配者の数や支配期間についての記事は重複するので省略し、それに続いて記録され

る13名のスルターンの称号を含めたフルネームについても本文に現れるものと同一であるので省略する。

《Aya Sofya 3605 写本 NT 第4部第5族セルジュク朝についての記事の翻訳 [158r-162v]》(【 】内は筆者による補足)

I) al-Sultān Rukn al-Dīn Abū Ṭālib Ṭughril-bik b. Mikā'il b. Saljūq

彼はこの王朝 (dūdman) の最初のスルターンである。彼の居所はハマダーンであった。55年のラマダーン月にライで死去した。彼の王権の期間は26年であった。

II) al-Sultān 'Izz al-Dīn Abū Shujā' Albarlān Muḥammad b. Ja'far-bik b. Mikā'il

極めて威厳のある威丈夫であった。全世界に攻撃をかけた。Faqlawayhと共にフェールスに来てフェールスを取った。12000騎を率いて Pūl-i Kistrā で30000騎を有するルームの王 Armāniyūs を攻め、敗走させた。Armāniyūs は、極めて身分が低いため閲兵の際、閲兵官が名を記さず、バグダードのシフナ Sa'd al-Dawla が「書け、彼がルームの王を捕らえるかもしれぬ」と言ったほどの、あるルーム人のグラームの手で捕虜となった。【スルターンは】毎日1000ディーナールを支払うという条件で、ルーム王に生命の保証を与えた。治世の終わりにマーワラーアンナフルへ向かい、PRMの城を包囲した。城主が連行された。彼に一人の人物が付き添っていた。スルターンは彼を尋問したが、正直に言わなかったので、スルターンは彼に懲罰を与えるように命じた。彼は短剣を抜き、スルターンに向かってきた。グラームたちが彼を捕らえようとしたが、スルターンは弓射に自信を持っていたので彼らを制止した。矢は外れ、その男が来てスルターンに傷を負わせた。そのために死んだ。彼の王権の期間は12年であった。

III) Mu'izz al-Dīn Abū al-Faṭḥ Malikshāh b. Alb Arslān

彼は良好な運と好都合な時代を持った。世界の多くの地方は彼の支配下にあった。彼のワズィール Niẓām al-Mulk Ḥasan はハンを捕虜としてスルターンがサマルカンドから帰還の際ジャイフーンの船頭たちの賃金をアンターキーヤに割り当てたと言われるように。20年間幸福に世界の支配者として過ごした。彼の時代の著名なイマームのうちに Imām al-Ḥaramayn Abū al-Ma'ālī 'Abd al-Malik Juwaynī がいた。

IV) al-Sultān Rukn al-Dīn Abū al-Fawāris Kayāruq b. Malikshāh

父の皇太子 (wali 'ahd) であった。彼と兄弟の Maḥmūd の間に戦いがあったが、彼の時代に【Maḥmūd は】天然痘で死去した。Muḥammad がその後帝王となった。彼ら【Kayāruq と Muḥammad】が相争っていた頃、マラーヒダが力を持ち始め、Ḥasan Ṣabbāḥ はダーイーたちを任命し、'Abd al-Malik b. 'Aṭās をイスファハーンへ送った。彼は多くの人々を迷わせ、イスファハーンのシャーフ・ディズ (Shāh-diz) へ行き、守備兵を欺いて城を奪取した。彼

【Kayāruq】の王権の期間は12年であった。

V) al-Sulṭān Ghiyāth al-Dīn Abū Shujā' Muḥammad b. Malikshāh

Kayāruq が死去するとスルターンの地位は彼に定まった。彼は父のマワーリーであり、服従の道から外れた Ayāz や Ṣadaqa と戦うためバグダードに向かった。彼らの間で激戦が起こった。Ayāz の陣営の上方に煙が上がり、龍の形になって現れた。その恐怖から彼らは逃げ、Ayāz は捕虜となり、Ṣadaqa は戦死した。そこから戻るとシャーフ・ディズの包囲に従い、'Abd al-Malik 'Aṭās を降伏させ、惨めな恰好でイスファハーン中を引き回し、その後殺した。彼の王権の期間は13年であった。

VI) al-Sulṭān Mu'izz al-Dīn Abū al-Ḥārith Sanjar b. Malikshāh

兄弟たちの時代20年間ホラーサーンの帝王であった。Muḥammad の死後40年帝王権を行使した。ホラーサーンに留まった。Mughīth al-Dīn Abū al-Qāsim Maḥmūd b. Muḥammad が彼に反乱したが、敗北し、その後彼の許に来て反乱を詫びたのでスルターンはイラクにおける自分の代理の地位を彼に与えた。彼の時代にグズ (Ghuz) の部下 (ḥasham) がジャイフーンを越え、スルターンの部下は彼らに迷惑していた。スルターンは何度も戻るように命じた。彼らは多くのハラージュを支払う義務を負っており、スルターンは生命の保証を与えていた。結局スルターンは彼らに立ち向かうことになり、グズたちは女子供を前面に立てて嘆願しつつ進んで来て、各戸が1マンの銀を支払うことを約した。スルターンは帰還を望んだが、Mudabbir al-Mulk 'Ajāmī が許さなかった。グズたちは絶望すると命の限りに奮闘し、スルターンを捕虜とした。彼らはホラーサーンとキルマーンへ向かい、町を破壊し、無数の人々を殉教させた。最高の学者 (afḍal-i 'ālim) Imām Ghazālī の弟子の Muḥammad b. Yaḥyā のような人を拷問にかけて殺した。彼らがバルフに着くとグズたちと交際があったスルターンのマムルークたちの一団がスルターンの監視人たちを欺いて【スルターンを解放した。】ある日彼らはスルターンと共に狩をしながらジャイフーン河の畔で遊んでいた。ティルミズ (Tirmidh) の境界に入った時そこで【スルターンが】死去した。グズたちはフェールスやキルマーンの境域まで来た。彼らのアミールたちはある日シャバーンカーラ (Shabānkāra) の近くで狩に行った。シャバーンカーラの王は彼らを待ち伏せし、彼らが武装していないのを見て殺害した。

VII) al-Sulṭān Mughīth al-Dīn Abū al-Qāsim Maḥmūd ibn Muḥammad

4年イラクでスルターン Sanjar の代理を務めて死去した。

VIII) al-Sulṭān Rukn al-Dīn Abū Ṭālib Ṭughril b. Muḥammad

叔父【Sanjar】の代理で、父の後継者であった。

IX) al-Sulṭān Ghiyāth al-Dīn Abū al-Faṭḥ Mas'ūd b. Muḥammad

兄弟【Ṭughril】の後17年イラクのスルターン権を行使した。彼の時代には多くの出来事が起こった。グズがスルターン Sanjar に反乱した。彼【Mas'ūd】と兄弟の間で何度も戦い

があった。彼のマワーリーや代理人たち (nuwwāb) が各地で独立した。アーザルバイジャンのアタベグ Ildikiz, イラークのアタベグ Pahlawān のように。ファールスでは彼の甥であった Malikshāh にサルグル朝が反乱した。

X) al-Sulṭān Mughīth al-Dīn Abū al-Faṭḥ Malikshāh b. Maḥmūd b. Muḥammad

スルターン Mas'ūd は Malikshāh とその兄弟の Muḥammad をアタベグ Tūrāba と Tāj al-Dīn wazīr と共にパールス (Pārs) へ送っていた。スルターンがバグダードにいた時 Tūrāba は彼らをイスファハーンへ連れて行き, Muḥammad を即位させ, 【スルターンとしての太鼓を】 5度打った。スルターン 【Mas'ūd】 は彼らの方へ向かい, Tūrāba も軍を率いて 【スルターンを】 迎え撃ったが, 殺された。スルターンの子供たち 【Malikshāh と Muḥammad】 はパールスへ戻ってきたが, サルグル朝が反乱し, 彼らは逃げた。叔父 【Mas'ūd】 が亡くなると彼 【Malikshāh】 は再びその地位 【スルターン位】 に即位したが, アミールたちを顧みなかったので 4カ月後アミールたちは一致して彼を欲待に招き, 【捕らえて】 彼を監視させた。

XI) al-Sulṭān Ghiyāth al-Dīn Abū Shujā' Muḥammad b. Maḥmūd

彼の兄弟 【Malikshāh】 が監禁されると彼はフーズィスターンから来て, 帝王に即位した。Malikshāh をハマダーンの町から Kūshk へ送ったが, 彼はそこから逃げ, フーズィスターンへ行き, Muḥammad が死ぬまでそこにいた。Sulaymānshāh が即位すると 【Malikshāh は】 彼に反乱し, イスファハーンへ来てそこを押さえた。Muḥammad の帝王たる期間は 7年であった。

XII) al-Sulṭān Mu'izz al-Dīn Abū al-Ḥārith Sulaymānshāh Muḥammad b. Mas'ūd

スルターン Muḥammad が死去するとアミールたちやサドルたち (şudūr) は相談して彼について同意し, 彼をマウスィル (Mawşil) へ連れてくるように人を送り, 即位させた。アタベグ Ildikiz の懐柔のために彼の養子 (rabīb) Arslān に皇太子の地位を与えた。彼 【Sulaymānshāh】 は一日中快楽に耽り, 人々の嫌悪を買い, 6カ月後捕らえられて 'Alā al-Dawla の城に送られた。アーザルバイジャンから Arslān が呼ばれ, 即位した。15年と7カ月帝王権を行使し, ハマダーンで没した。

XIII) al-Sulṭān Arslān b. Ṭughril b. Muḥammad

父が死去し, スルターン位が彼に達した時小児であった。アタベグ Muḥammad b. Ildikiz が全ての裁決者であり, 全ての事柄は彼の占有の掌中にあり, 彼は王権の保護者, 教師であった。彼が没するとスルターン政権の基礎は崩壊し, 国の【基礎の】結び目は断ち切られた。アミールたちは一致して悲しんだ。彼の兄弟, アタベグ Qizil Arslān ibn Ildikiz がイラークに来てスルターンに即位し, 【スルターンとしての太鼓を】 5度打ったが, 数日後のある晩何人かのフィダーイー (fidā'i) の手で殺された。スルターン Ṭughril はアタベグの部下に苦しめられており, 彼らを排除するため次々とスルターン, ホラズムシャーフに手紙を書き, 援助を求

Aya Sofya 3605 ペルシア語写本 *Nizām al-Tawārikh* 中のセルジューク朝関連の記事について (上)

めていた。この間に大軍がライにやってきた。スルターンは少数の者たちと彼らの方へ向かい、自ら彼らのうちに突入し、兜を頭上に取り上げ、自らの名と系譜を呼ばわって戦ったが、彼の周りは包囲され、哀れな号泣と共に彼は殺された。この地方【イーラーン】におけるセルジューク家の王権は終わったが、ルームのスルターンの位は依然彼らの上に定められており、現在は Sulṭān ‘Alā’ al-Dīn Qilij Arslān ibn Mas‘ūd b. Qilij Arslān b. Sulaymān b. QLPMYN の子孫が保有している。神がもっとも良く知る。

(本稿においては紙幅の関係で、NT の第 4 部第 5 族セルジューク朝の部分の訳出に止め、翻訳に対する訳注と解説、及び NT の史料としての性格についての私見などについては次号に掲載予定とする。尚、本稿は平成 5-7 年度科研費、総合研究 A 「ペルシア語古写本史料精査によるモンゴル帝国の諸王家に関する総合的研究」(研究代表者) 志茂碩敏 (叢東洋文庫) による研究成果の一部である。)

註

- 1) NQ については拙稿「*Nuzhat al-Qulūb* に現れるルームの諸都市」『東洋文化学科年報』第 2 号、1987 年、92-100 頁参照。また NQ の Fatih 4517 写本については同じく拙稿「Fatih 4517 ペルシア語写本 *Nuzhat al-Qulūb* に見えるルーム地方の記述について」『追手門学院大学文学部紀要』第 27 号、1993 年、97-104 頁参照。Fatih 4517 写本と Le Strange による校訂テキストの間にはバイダーについても 3 箇所の違いが見られる。その一つは「土」(原語は turba) と訳した単語が写本では tirma (意味は「薄い綿糸で織られる高価な布」カシミールやキルマーン産が有名) となっており、さらに「学問に精通した」(原語は mutabaḥḥir) が muftakhir (意味は「誇りとする」) に、またバイダーウィーのクンヤが Abū Sa'd になっている。このうちで muftakhir という語は文脈から見てこうあっておかしくはない。他の 2 箇所はおそらく Le Strange のテキストが正しいと思われる。
- 2) Aya Sofya 3605 写本については現地での調査を基に Felix Tauer が簡単に紹介している。"Les manuscrits persans historiques des bibliothèques de Stamboul" *Archiv Orientalní*, Vol. 3, No. 1, (1931) p. 92. 筆者もこの紹介によって写本の存在を知った。
- 3) TNI のペルシア語校訂テキストの校訂者 Muḥammad-Taqī Mudarris Riḍawī による緒言 31 頁にこの奥書が採録されている。校訂者によれば Aya Sofya 3605 写本の TNI は彼が校訂に利用したうちで最古のものであるという。
- 4) この碑文については、他にセルジューク朝時代の医学史に関する专著 A. Süheyl Ünver, *Selçuk Tababeti*, Ankara, 1940, s. 52 にも同文が掲載されている。
- 5) AYNṬĤN Rūmi はおそらく [TG: 98] に現れる Anṭikhus という人名の誤記であり、Anṭikhus はイスカンダル (アレクサンドロス) の武将セレウコスの子、アンティオコスの名を写したものであろうと推測される。
- 6) サッファール朝最初の君主で、NT にも彼の事跡は記されている。それによれば彼が現れたのは 255 (868/9) 年で、265 (878/9) 年に没したという。[148 r-v]
- 7) この王朝は通常ガズナ朝 (Ghaznawiyān) と呼ばれるが、NT では一貫してガズニー朝 (Ghazniyān) と記されている。この王朝の首都ガズナも例外なく Ghazna と綴られている。[151 v-153 v]
- 8) JT ではスンジャク (Sūnjāq) と綴られている。スンジャク・ノヤン (アカ) の系譜については志茂碩敏『モンゴル帝国史研究序説』東京大学出版会、1995、146-7 頁参照。

井 谷 綱 造

〈史料の略号〉

- JT III : Rashīd al-Dīn Faḡl Allāh, *Jāmi' al-Tawārikh*, Tom III, (nauchno-kriticheskiy tekst) A. A. Ali-zade, Baku, 1957
- MA : Shabānkāra'i, *Majma' al-Ansāb*, (taṣḥīḥ) Mīr Hāshim Muḥaddith, Tihrān 1363
(写本 : Yeni Cami 909)
- MAA : Aqsarā'i, *Musāmarat al-Akhhār (Tadhkira)*, (tashih ve neşreden) Osman Turan, Ankara, 1944 (写本 : Aya Sofya 3143, Yeni Cami 827)
- NQ : Ḥamd Allāh Mustawfi, *The geographical part of the Nuzhat al-Qulūb*, (ed) G. Le Strange, Leyden & London, 1915 (写本 : Fatih 4517)
- NT : Bayḡāwī, *Nizām al-Tawārikh* (写本 : Aya Sofya 3605)
- TB : Banākātī, *Rawḡat Ūlī al-Albāb fī Ma'rifat al-Tawārikh wa al-Ansāb (Tārikh-i Banākātī)*, (kūshish) Ja'far Shi'ār, Tihrān, 1348 (写本 : Aya Sofya 3026)
- TG : Ḥamd Allāh Mustawfi, *Tārikh-i Guzīda*, (ihtimām) 'Abd al-Ḥusayn Nawā'i, Tihrān, 1362 (chāp-i duwwum)
- TNI : Naşir al-Dīn Ṭūsī, *Tansūkh-Nāma-yi İlkhānī*, (muqaddima wa ta'liqāt) Muḥammad-Taqī Mudarris Riḡāwī, Tihrān, 1363 (chāp-i duwwum) (写本 : Aya Sofya 3605)

1995年9月30日 受理